

# 『今月の天候と農作業』

通巻第5610号  
12月号  
平成29年11月30日発行  
宮崎県  
宮崎地方気象台



## 【特に注意を要する事項】

期間の前半は、気温がかなり低くなる可能性があります。

## 【予報のポイント】

寒気の影響を受けやすいため、向こう1か月の気温は低く、特に期間の前半はかなり低くなる可能性があります。

## 【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	60	30	10
降水量	九州南部	30	40	30
日照時間	九州南部	30	40	30

## 【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、低い確率60%です。

週別の気温は、1週目は、低い確率70%です。2週目は、低い確率70%です。

3～4週目は、平年並または低い確率ともに40%です。

### <1 週目の予報> 12月2日(土)～12月8日(金)

気圧の谷や寒気の影響で曇りや雨の日が多いでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、

週間天気予報 (<http://www.jma.go.jp/jp/week/>) を参照してください。

### <2 週目の予報> 12月9日(土)～12月15日(金)

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

### <3 週目から4週目の予報> 12月16日(土)～12月29日(金)

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

## 普通作物

### ◆水稲

---

#### 1 ほ場の準備

土作りは良質米の安定生産の基本です。

堆肥施用は前作の条件でも異なりますが、牛糞の場合は1 t程度投入します。ケイ酸質資材は稲の茎葉を硬くし、倒伏やいもち病にも強くなる効果があるため、地区基準や土壌診断結果をもとに施用します。

ロータリー耕だけでは作土が浅くなるため、プラウによる深耕を行い、根域を15 cm以上確保しましょう。プラウ耕は作土層を深くする他に、除草の難しいクログワイ、オモダカなどの塊茎（イモ）を厳寒期の低温や乾風にさらし、密度低下をもたらす効果もあります。

また、厳寒期の耕うんはスクミリングガイの破碎や低温による越冬貝の密度低下の効果もあるため、発生ほ場ではロータリー耕の回転数を上げて低速で行います。

#### 2 種子の準備

種子の自家更新は、異品種混入やイネシンガレセンチュウ、馬鹿苗病等の発生の恐れもあるため、採種ほど生産された種子を利用しましょう。種子を扱う際は、他品種との混米防止のため、資材の清掃やラベルの確認等を行います。

### ◆麦類

---

#### 1 播種・排水対策

平坦地でも播種の適期は、12月上旬頃までです。遅れる場合は、播種量を増量し、茎数を確保します。発芽やその後の生育で湿害を受けないよう、作溝して排水対策に努めましょう。

(荒砂 英人)

## 施設野菜

### ◆共通事項

---

近年、暖房経費の負担が大きくなっています。小さな対策の積み重ねが大きな経費の削減につながるので、身近なところから万全の対策を実施しましょう。

### ◆きゅうり

---

促成栽培の摘心栽培では、子～孫づる、つる下ろし栽培では主枝となる子づるの収穫期です。

ハウス内の温度管理は、全作型で午前中26～28℃、午後23～25℃、夜間12～14℃を目標に管理します。

摘心栽培では採光・通風を良くするため、孫づるまでは規則的に摘心し、ひ孫以降は生長点を2～3本確保しながら、込み合った場所の枝を中心に整理します。追肥は10a当たり窒素成分で、月に5～6kgをかん水時に施用します。

つる下ろし栽培でも、着果が安定してきたら、午前中は空中湿度を確保するために内張りビニールの開閉により湿度調節を行います。追肥は、摘心栽培と同様に行います。

## ◆ピーマン

---

促成栽培は、収穫とあわせ懐枝（ふところえだ）及び側枝の整理を行います。整枝法は低位節から発生している徒長枝は根元から除去し、第3～4分枝の懐枝は、収穫が終わったら1節を残し適宜、切り戻します。第5分枝以降の側枝については2～3節で摘心を行います。

2月までは、月に10a当たり窒素成分で3～4kgずつ追肥します。ハウス内の温度は、午前中26～28℃、午後24～26℃とし、夜間は18℃とします。

## ◆トマト

---

促成栽培の丸トマト、ミニトマトともに収穫期です。開花段ごとに10a当たり窒素成分で1kgを目安に追肥を行います。ハウス内の温度は、午前中26～28℃、午後23～25℃、夜間10～12℃とします。ミニトマトはこれより1～2℃高めに管理します。

## ◆いちご

---

頂花房の収穫と第1腋花房（2番果）の肥大期です。着果負担も大きく、草勢が低下すると第2次腋花房（3番果）以降の収量、品質に影響するため、液肥主体で、月に窒素成分で10a当たり2～3kgを目安に追肥します。低温期は吸水量、吸肥量ともに低下するので、かん水、追肥ともに生育を見ながら控え気味に行います。ハウス内の温度は午前中25～28℃、午後20～25℃、夜間5～8℃を目標に管理します。

（黒木 正晶）

## 葉茎菜類及びいも類

大型機械による踏圧や不適切な土壌水分での農作業による練り返しで不透水層ができたほ場には排水性改善のためのサブソイラ耕を行います。乾燥が進んだ状態での施工が効果的なため、ほ場の状態を良く観察してタイミングを逃さず作業を行いましょう。

## ◆にら

---

促成栽培の収穫期です。無加温栽培では、過湿による白斑葉枯病の発生や凍害による葉先のヤケが心配されます。白斑葉枯病の予防的な防除を行い、発生源となる残さをハウス外に

持ち出すとともに、除湿保温に配慮しましょう。加温栽培では、最低夜温を5℃に設定しますが、刈り取り後3～4日だけは、10℃に設定にすると、萌芽が早く、丈夫な株になります。

## ◆さといも

---

収穫が終了した、さといもの畑は地温の低下に伴い残さ分解が悪くなるため、すぐに片付けを始めます。残さの分解を進めるためには、トラクタ速度を遅く、ロータリー回転を早くし、できるだけ細かく破碎します。また、残さを畑付近の空き地に放棄することは決してしないでください。

## ◆ごぼう

---

トンネル栽培は上旬には播種を終えましょう。発芽適温は20～25℃で、30℃以上では発芽率が低下するので、高温になる時には換気が必要です。特に、トンネルビニールが新品の場合は高温になりやすいので注意しましょう。

## ◆にんじん

---

トンネル栽培は、上旬には播種を終えましょう。地温が不足すると発芽までの日数がかかり、不揃いになるので、25～28℃で管理し、30℃以上になる時は換気をします。発芽後、1月下旬の肥大期までは比較的高温を必要とするため、同じ条件の管理を続けます。

## ◆アスパラガス

---

地上部を刈り取る時期です。刈り取りは茎葉が完全に黄化した後が望ましく、今月下旬が適期になります。今月下旬から来月上旬になると株は休眠から覚めて萌芽できる状態になるため、早出しをする場合は、12月中旬までに刈り取りを終えましょう。

(杉村 幸代)

# 果 樹

## 1 常緑果樹

---

### ◆露地柑橘の病害虫防除

黒点病は柑橘の重要病害の一つです。樹冠内の枯れ枝の除去を徹底し、越冬病原を減らすとともに、剪定により薬剤がかかりやすい環境を確保しましょう。

ハダニやカイガラムシ類の越冬虫数を減らすため、マシン油乳剤を散布しましょう。この剤は虫が呼吸する気門を塞ぐことにより殺虫するので、化学農薬に見られる効果の低下はあ

りません。枝や葉に十分な量を散布してください。なお、樹勢が弱った樹には冬の散布は避け、3月上旬頃の発芽前に散布します。

#### ◆完熟きんかん

1月中旬からは、完熟きんかんの収穫が始まります。果実肥大が十分に確保されている園では、昼間の温度は15℃程度を目安に管理し、着色促進に向けて管理しましょう。肥大不足で、秋季高温管理を行っていた園でも徐々に温度を落としていきましょう。成熟が進んできた園では高温と高湿度により、水腐れ症や裂皮が発生するので、早朝の換気により、施設内湿度を低く維持しましょう。

#### ◆マンゴー

秋季夜間冷房を実施した園では既に出蕾が見られています。出蕾後、急に温度を上げると花芽が少なかったり、花が咲いても結果が悪いなどの状況が懸念されます。花芽の発生状況を確認しながら、じっくりと温度を上げ、充実した花を確保しましょう。

## 2 落葉果樹

---

#### ◆基肥の施用

落葉果樹は柑橘類等の常緑果樹と違い、根の活動が始まるのは2月上旬頃と早い傾向にあります。このため、なし、くり、かきなどは年内に基肥を施用しましょう。

#### ◆くりの剪定

大玉多収生産のためには、剪定が非常に重要です。弱小枝はすべて除去し、太さ8mm以上、長さ50cm以上の結果母枝を1㎡当たり5本程度になるように整理しましょう。

## 3 果樹園共通

---

#### ◆石灰の施用

土の酸性化は肥料の吸収や根の生育を阻害して、樹勢低下を招きます。土壌分析を行い、酸性の場合は石灰質資材で調整しましょう。

(鈴木 美里)

## 花 き

#### ◆花き全般

---

12月はやや不安定な天候になる予報が出されていますので、日々の気象情報を確認し、天候に応じた細やかな栽培管理を心がけましょう。

## ◆電照ギク

---

「神馬」系統は10℃以下の低温に遭遇すると開花遅延を起こす恐れがあるため、消灯までは夜間の温度を13℃（実温）で管理する必要があります。消灯前の栽培期間中に低温に遭遇した場合は、消灯2週間前からの夜温15℃で予備加温を行います。低温開花性品種「神馬66-4」は、消灯後は18時～1時までは15℃、1時以降は12℃の変温管理を行うと大幅には開花が遅れずに、暖房コストの削減が可能です。

## ◆スイートピー

---

11月以降は全般的に安定した生育であり、継続的な出荷に備え、各ほ場において着花を安定させる草勢管理に努めましょう。また、花シミや灰色かび病発生リスクが高まるので、微生物農薬の活用や暖房制御装置の効果的な活用、夕方の除湿換気等の対策に取り組みましょう。

## ◆デルフィニウム

---

収穫前から2番花の抽だいが始まっている株もあるため、出荷計画にあわせた温度・施肥管理を行ってください。1番花出荷終了後の夜温管理は、ロゼットを回避して1～2月に出荷を行う作型では抽だいで15℃、ロゼットを打破して3～4月に出荷を行う作型では一定期間低温でロゼットを打破した後、10～15℃で加温を行ってください。さらに、電照を行う必要もあるため、地域の農業改良普及センターに相談してください。

## ◆トルコギキョウ

---

低温により施設内の湿度が高まり、花シミの発生リスクが高まります。発蕾から開花期に加温温度を高めると花シミの発生が減少し、品質や収穫後の日持ちが向上するため、特に、開花期については換気除湿等の対策と夜温15℃の加温を行いましょう。

## ◆ホオズキ

---

早い地域では1月から植え付けが始まります。定植前にはほ場の消毒や親株の地下茎の堀上・調整など準備を始めてください。特に、白絹病等の立ち枯れ性病害やネコブセンチュウが発生したほ場は、事前にマルチ等で地温を高めておき、土壌消毒の効果高めましょう。また、植え付ける地下茎の選別・消毒は十分に行ってください。

## ◆ラナンキュラス

---

内ビニールの開閉をしっかり行い、昼間は換気を徹底して品質の向上に努めましょう。ハウス内の気温を下げすぎると生育が停滞し、収量があがらないため、15℃程度を目標に温度管理を行いましょう。1番花の収穫が始まると草勢が低下する場合が見られるため、硝酸態窒素の割合の多い液肥を適宜施用して草勢の維持を図り、安定的な採花を行いましょう。

（中村 広）

## 畜産

### ◆家畜

---

先月、国内において野生のコブハクチョウ、キンクロハジロから相次いで鳥インフルエンザウイルスの簡易検査で陽性反応が出ました。また、韓国でもアヒルから高病原性鳥インフルエンザ（H5N6亜型）が検出されました。これらのことから養鶏農場へのウイルスの侵入リスクは高まっていると考えられます。鶏舎や農場内の石灰消毒と防鳥ネットの再点検を早急に行いましょう。野生動物の進入防止策として電気柵（2段張り：下段10cm、上段20cm）の有効性が報告されています。野鳥はもちろんのこと、ネズミなどの野生動物を鶏舎内へ侵入させないことが鳥インフルエンザ発生のリスク低下につながるため、実践しましょう。

本格的に寒さが厳しくなり、特に朝夕の気温が急激に低下する時期です。幼畜は、寒さや急激な温度変化に特に弱いため、カーテンやコンパネを設置するなど隙間風が直接当たらないよう防風対策をしましょう。アンモニアガスなどの有毒ガスの発生を防ぐためにも床の清掃、敷料の交換を行いましょう。気温の上がる日中に畜舎カーテンを開け、換気扇やファンを回すなど、こまめな換気を行いましょう。床が乾燥しすぎると、舞いあがった埃や塵を家畜が吸い込み呼吸器疾患を発生しやすくなるので、細かな霧を噴霧するなどし、適度な湿度を保ちましょう。

### ◆飼料作物

---

飼料作物を作付けする時は、完熟堆肥を施用します。未完熟の堆肥を施用すると発芽障害や雑草繁茂の原因になるため、堆肥舎で十分に攪拌し、発酵温度を上げ（60℃以上）て、雑草の種子を死滅させます。堆肥に加え、石灰やヨウリンなどの土壌改良資材を施用すると、良質な自給飼料が生産できます。定期的に土壌分析を実施し、適正な施肥管理を実践しましょう。

（大山 佐喜子）

## 工芸作物

### ◆茶

---

#### 1 茶樹の凍害対策

気温の低下に伴い茶樹の耐凍性は徐々に高まりますが、今年、中切りを行った茶園では急激な低温により、越冬芽凍害（芽つぶれ）や裂傷型凍害（幹割れ）が発生しやすくなります。

防霜ファンやスプリンクラーを利用して防寒対策を実施する場合は、実際の気温とセンサーの温度差を確認した上で、設定温度を0℃とし、越冬芽の耐凍性獲得状況を確認しながら実施します。

また、幼木園では株元への敷きわら等を実施します。

#### 2 カンザワハダニの防除

一番茶の収量や品質に対する影響が大きいカンザワハダニは冬期でも産卵する個体が多いため、越冬前後の防除により、密度を下げるのが重要です。

防除時は、事前に裾刈りを行い、裾部や葉裏への薬剤付着状況を確認しながら、防除暦に従って散布します。

#### 3 チャトゲコナジラミの発生の確認

県内の茶園でもチャトゲコナジラミの発生が拡大しています。この害虫は茶葉の裏に寄生して越冬するため、茶葉の裏を確認し、見慣れない虫を発見した際は、最寄りの農業改良普及センター等へ連絡してください。

#### 4 新・改植園の準備

茶園の有効土層は60cm程度とされていますが、茶の根は1m以上伸びることもあります。来年の春に新・改植を予定しているほ場では少なくとも60cm、できれば1m以上の深耕や天地返し等を実施し、有効土層を確保します。また、土壌pHの改善や排水対策等も実施しましょう。

（黒木 清人）

### ◆しいたけ

---

#### 1 原木の玉切り

原木伐採後、1～2ヶ月程度の葉枯らし乾燥が終了したら玉切り作業を行います。玉切りの適期は、

- ①若い木では木口面に半径の2／3程度、老齢木では樹皮近くまでひび割れが入った時
- ②小枝を折り曲げた際にササクレ状に折れる時
- ③小枝の内樹皮が褐色に変わる時とされています。

#### 2 植菌

玉切り後は、害菌や害虫の侵入防止のため、早めに植菌を行います。



種菌は栽培条件や目的に合った品種を選定します。

植菌（種駒）数は、末口直径（cm）の2倍以上の数とし、植菌間隔は縦に長く、横に短くし、千鳥状に行います。樹皮に傷がある場合や枝の切り口がある場合は周囲に余分に植菌して、害菌の侵入を防ぎましょう。

（永野 学）

## ◆たばこ

---

今月は来年作に向けての準備が主な作業となります。

- 1 葉たばこの大きな減収要因である立枯病・疫病等の土壌伝染性病害の菌密度の低減と土壌消毒の効果を向上させるため、冬期耕耘を10日おきに3回以上行いましょう。  
また、溝掘機等を用いて排水溝を完備し、耕種的防除に努めましょう。
- 2 土壌消毒を実施する際には、農薬使用基準に沿って薬害・公害の無いよう、最大の注意を払い使用しましょう。  
特に、ピクリン剤による土壌消毒はグレー葉の生出原因となるので、使用時期と使用量に十分注意しましょう。  
また、ピクリン剤による全面消毒を実施する場合は、植付3ヶ月前までとなります。
- 3 肥料の分解を進め、初期生育を促進するために未熟堆肥の使用を避け、施肥畦立は、移植1ヶ月前までに完了しましょう。特に水田は、年内施肥に努めましょう。また、畦立は練り畦防止のため、土壌水分の良い時期に行いましょう。

（宮崎県たばこ耕作組合）

## 内容の詳細について

---

12月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県農業経営支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前・事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ。

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

（<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>）

## 向こう1カ月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

農作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
施設果菜類	病害一般	—	暖房経費低減のため、ハウスを多層・多重被覆にしているところでは、施設内が多湿になりやすく病害の発生が助長されるので、換気や早朝加温など適切な温湿度管理に努めます。
冬春きゅうり	べと病	並	いずれの病害も多発してからでは防除効果が低くなるので、予防に重点をおき、発生が見られたら初期防除を徹底します。 うどんこ病は乾燥時に多発するので、ほ場内が過乾燥にならないように管理します。 褐斑病は平年並の発生ですが、べと病やうどんこ病の発病後に激発することがあるので注意します。
	うどんこ病	並	
	褐斑病	並	
	黄化えそ病 (MYSV) ミナミキイロアザミウマ	前年より多い やや少	キュウリ黄化えそ病(MYSV)の発生が、県内全域で確認されています。発病株を確認した場合は直ちに抜き取り、適切に処分するとともに、本病を媒介するミナミキイロアザミウマの防除を徹底します。
	病害虫全般 (改植時の留意点)	—	ウイルス病を媒介するコナジラミ類やミナミキイロアザミウマに対しては、前作のきゅうりを抜根する前の防除を徹底するとともに、抜根後は少なくとも20日間蒸し込みます。 また、前作に褐斑病などの発生があった場合には、後作きゅうりの定植後に直ちに防除し、感染を防ぎます。
冬春ピーマン	斑点病	並	うどんこ病は、乾燥時に多発するので施設内が過乾燥にならないように注意します。一方、うどんこ病以外の病害は、多湿条件で発生しやすいので、ハウス内の温湿度管理、排水対策等を徹底します。 いずれの病害も、予防・初期防除を徹底し、罹病した枝葉は感染源となるので、発見したら直ちに除去し、ほ場外に持ち出します。
	うどんこ病	並	
	黒枯病	並	
	ミナミキイロアザミウマ	少	ミナミキイロアザミウマは10花当たりの寄生虫数が1頭から被害につながるとされています。多発してからでは防除効果が低くなるので、低密度のうちに防除を徹底します。また、有色粘着板を設置し、発生密度を抑制します。
	ヒラズハナアザミウマ	やや少	
	タバココナジラミ	並	
冬春トマト	葉かび病	やや多	葉かび病・すすかび病は、多湿条件で発生しやすいので過繁茂にならないように管理を行い、ハウスの換気を良くします。病勢が進展してからでは防除効果が低いので、発病を確認したら早めに防除します。 薬剤の感受性低下(耐性菌の出現)を防ぐため、薬剤のローテーション散布を行います。 トマト黄化葉巻病の発病株は伝染源になるので、必ず株全体を抜き取り土中に埋めるか、ビニール袋に入れて枯れるまで密閉します。
	すすかび病	やや多	
	トマト黄化葉巻病 (TYLCV)	並	
	タバココナジラミ	並	
冬春いちご	うどんこ病	やや少	うどんこ病は、予防に重点をおくとともに、罹病葉・果実は伝染源となるので速やかに除去します。 炭疽病を発病した株は早期に除去し、新たな感染を防止します。 ハダニ類は寄生数が増加してからの防除は難しくなるので、低密度時の防除を徹底します。なお、薬剤感受性が低下しやすいので同一系統薬剤の連用は避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を心掛けます。
	炭疽病	少	
	ハダニ類 ※	やや多	
	アブラムシ類	やや少	
かんきつ類 (露地栽培)	ミカンハダニ	並	マシン油乳剤は、薬剤感受性の低下した個体群に対しても効果が期待され、また、カイガラムシ類との同時防除も可能であるので、樹勢が弱っていないことを確認し、防除します。
茶	カンザワハダニ	並	冬季のマシン油乳剤の散布は、薬剤感受性の低下した個体群に対しても防除効果が期待できます。

- 1) ※は防除情報を発表しています。
- 2) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。
- 3) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、<http://www.jpnp.ne.jp/miyazaki>です。

